

■ 肢体不自由のある子どもたちへの実践事例

どんなときもどんな場所でも楽しめる 読書活動の実践報告

横浜市立中村特別支援学校
関戸優紀子

はじめに

本校は、昭和57年4月に中村養護学校として、中村小学校と併設する形で開校しました。現在では小学部40名（うち訪問籍3名）、中学部12名（うち訪問籍2名）、高等部23名（うち訪問籍1名）の計75名、そして横浜医療福祉センター港南の中にある分教室には、21名の児童・生徒が在籍しています。

本校の近くには、横浜市立大学附属病院や地域活動ホームがあります。本校に通う子どもたちの障害の状態は、近年多様化しています。

教育課程は自立活動の子どもがほとんどですが、知的代替、準ずる教育を行う子どもも在籍しています。興味・関心の幅を広げたい子どもの他に、言葉の習得を目指す子どもも近年増えてきました。

中村小学校と併設されている本校にとって、学校間の交流は、たいへん重要な教育と考え、積極的に行っています。ドア1枚で学校がつながっているので、日常的に自由に学校間の行き来があります。小学生が昼休みに本校の

子どもたちにリコーダーの演奏を聞かせてくれたり、本の読み聞かせをしてくれたりすることもあります。運動会や避難訓練などの行事も合同で行います。また、教員間の交流も活発に行っています。

交流によって、本校児童・生徒が受ける影響は大きなものがありますが、中村小学校の児童に与える影響はより大きなものがあります。

活用事例

〈高等部1年・女子A〉

実態としては、小学部6年生から昼休みを中心に、iPadのアプリ「ボイス・オブ・デイジー」を使用して「わいわい文庫」の本を読んできました。また、中学部1年生からはコミュニケーションの能力の育成をねらった学習の教材としても使用してきました。

Aさんは「わいわい文庫」の本読みが大好きです。特に目次から教員が本を選び、自分の好きな本が始まると、最高の笑顔を見せたり、声を出して笑ったりします。給食が終わると、早

く本読みをしたくて、「ラララ～」と大きな声で周りの人に伝えられるようになりました。Aさんが「ラララ～」と言うと、近くにいる教員が、期待感いっぱいのAさんの熱い視線を感じながら、iPadを設置しアプリを起動させます。最初のうちは教員を目で追って訴えていましたが、「わいわい文庫」への興味・関心の高さを利用し、発声でコミュニケーションをとることができるようになったのです。

そんなAさんが中学部2年生のときに、今までの発声がなくなったり、やりとりができなくなったりしました。原因の一つとしては、環境が考えられました。中学部2年生のときは、毎日「わいわい文庫」の読書活動ができなかったことと、Aさんが手術を受け長期休みがあったことで、Aさんにとって楽しい昼休みの見通しがもてなくなったのだと考えました。

そこで、中学部3年生では、担当の先生に協力をお願いして、基本的に毎日読書環境が整うようにしました。4月から毎日のように昼休みはiPadによるわいわい文庫の本読みを行いました。方法はさまざまですが、毎日取り組むことで、Aさんの発声でのやりとりが増えました。大きな声で誰とでも「ラララ～！」と言って本読みをしたい要求を伝えられるようになりました。

また、「わいわい文庫」を使用して、

学習にも取り組みました。【視線で選択する】ということです。Aさんの好きな本の表紙の画面を写真カードにし、黒色のカードを並べ視線で好きなほうを選ぶという学習の教材にしました。「Aさん、読んでほしいほうを見て!」という教員の言葉がけで何度か取り組むと、Aさんは黒色のカードを見ると何もなくて、自分が本の表紙の写ったカードを見ると、先生が「わいわい文庫」の再生ボタンを押して本読みができるということを理解しました。そして、複数の本の表紙のカードからいま自分が読みたい本を選ぶことができるようになってきました。

そして、今年の春から、Aさんは高等部へ進学しました。本校は先に述べたように中村小学校と併設されているのですが、Aさんの教室は中村小学校1階にあります。教室環境だけでなく、授業内容や人的環境もがらりと変わり、Aさんはまた「わいわい文庫を読みたい!」という要求を教員に伝えるための発声がなくなりました。担任の先生から相談を受け、まずは、なぜ発声が出なくなったかを整理しました。その中で、昼休みの時間は今までより教室がざわざわしていること、誰に伝えて良いかがわからない、発声がないため、「わいわい文庫」を読まずに昼休みが終わることが続いているということがわかりました。そこで、発声がなくて

も毎日昼休みになったら「わいわい文庫」で本読みをしてもらうことにしました。毎日取り組むことで1週間もしないうちに、給食が終わりマットに降りる際に期待感をもつような表情をするようになりました。見通しをもててきたことが確認できたので、いよいよ発声を促すために、本人にはイヤホンで聞いてもらい、どのような発声でも良いので終わったことを発声で伝えられたら、教員が近くに行き、本人と次は何を読むかを決めてもらうように取り組みを始めました。

現在では毎日取り組むことで、小さな声ではありますが、「あ〜」という発声ができるようになりました。1冊を読み終える前に声を出すこともあり、「終わってから教えてね。」と教員が伝えると、終わるまで待ち、終わってから声を出すというコミュニケーションのやりとりにも、この「わいわい文庫」が使えています。

〈中学部3年・女子B〉

本生徒は、ここ数年で人とのコミュニケーションスキルが上がり、自分の想いを相手に伝えようとすることも増えてきました。身も心も大きく成長している最中です。そんなBさんですが、興味・関心を示す絵本にも変化がありました。中学部1年生では、短く繰り返しのあるような絵本は集中して聞いて

てみる事ができました。中学部2年生では、少しボリュームがあり、ページをめくるたびに暗い絵から明るい絵に変わる絵本に興味を示しました。

そして、今年度はストーリー性のある絵本にも内容によっては興味を示すようになりました。本人が興味を示しているのかを確認するために、夏休みに3冊の課題図書を読み聞かせを宿題として出しました。家族や訪問看護師に読み聞かせをしてもらい、3冊読んだ時の様子の記録をつけてもらいました。そこから、教員と家族や訪問看護師が一致して、同じ本に本人が興味を示しているという結果が出ました。その本とは『はじめてのおつかい』でした。本生徒は非言語によるコミュニケーションをとるためサインの習得をしているところですが、読み進める中で、さまざまなサインで、主人公の気持ちと想いを重ねている様子が見られました。おもに学習の時間は教員による絵本の読み聞かせを行いました。昼休みなどではiPadで『はじめてのおつかい』を読みました。教員が読めない時でも本人の興味・関心が高い時に、タイムリーに本読みができるため、気持ち途切れないため良いと改めて感じた瞬間でした。

本校では、昨年度より子どもたちの読書活動推進の取り組みの一つとして、図書と給食のコラボレーションを行っ

ています。学校栄養士と相談し、年間4作の絵本を題材に給食を出してもらいます。本生徒は、胃ろうから栄養を注入しています。コラボレーションメニュー「ぐりとぐらのカステラ」では、注入中の本生徒もiPadで『ぐりとぐら』を読みながら、カステラの甘い匂いをかぎました。興味深げにじっと画面を見つめる姿が印象的でした。



〈中学部2年・女子C〉

本生徒は、内言語が豊かで、教員が伝える話の理解力もとても高いです。iPadへの興味・関心も高いです。手の指先の動きや発声で教員とやりとりをすることができます。

図書と給食のコラボレーションメニュー「ぐりとぐらのカステラ」では、給食を楽しむために昼休みにiPadで『ぐりとぐら』を読みました。Cさんは必ずぐりとぐらがボウルに材料を入れて混ぜるところで、自分も混ぜるかのように手を動かしました。そして給食当日は、甘くて大きな黄色い

カステラができました。



Bさんはおいしそうにカステラをぺろりと食べました。そして、昼休みにまたiPadで『ぐりとぐら』を読みました。すると、いつもの材料を混ぜるところのページ以外に、大きなカステラが焼きあがるシーンなどのページでも画面に手を伸ばす様子が見られました。教員や友だちとのやりとりを好むCさんですが、人が介入しない中で、絵本と本人とのやりとりを感じた瞬間でした。その光景を見て、読書の醍醐味だと感じました。



おわりに

肢体に不自由があり、重度重複の子どもが多く通う本校では、教員との1対1の関わりを待つ時間も多く出てしまうことがあります。そんな時に、学習として、また、娯楽の時間として子どもたちの側にマルチメディアDAISY図書があることはとても有効なことです。

本校では各クラスにiPadがあり、子どもたちは学習にiPadを使用しています。また、高等部からは自分のiPadを学校に持ってきて学習に使用している生徒が多くいます。どの生徒もどちらかというiPadを自分で操作する学習

をしているため、「わいわい文庫」の本棚も文字だけよりも本の表紙の画像になることで、自分の読みたいものを子どもが一人で選べるようになるようになるのではないかと考えます。読書を通して、想像力や実体験につなげていくことができます。ひとりでは読むことが困難な子どもたちも、日常の中で当たり前のように、自分の自由な時間に読書をするのができたら素晴らしいと思います。今後、さらに使用者や使用場面を増やす中で、たくさん子どもたちに気軽に読書習慣をつけられればと願っています。

